

年間第 26 主日 (マタイ 21:28-32)

招きは兄にも弟にも父の思いを考えさせる



先週も、ぶどう園に労働者を送るたといえ話でした。今週は、自分の息子をぶどう園に送ろうとします。自分の息子がいないと仕事が回らないわけではありません。何かを学ばせ、伝えようとしているのかもしれない。父親の思いは何でしょうか。

先週のたとえ話と関連付けると、ぶどう園は、どんな人でも、たとえ 1 時間しか働かない人でも、一日の賃金を与えられる場所でした。一日の賃金と言いましたが、その日一日を暮らせる恵みを与えられる場所と言っても良いでしょう。

今週のぶどう園も、そのような場所かもしれません。ぶどう園に行く人は、例外なく、一日を暮らせる恵みを与えられる。その様子を、息子たちにも見せたい。そう考えたことは予想できます。将来、どちらかがぶどう園を受け継ぐでしょうから、見せておくのは大切でしょう。

兄は、父の勧めをいったん断ります。しかし兄は、あとで考え直して、出かけました。一方弟は、返事は良かったのですが、行きませんでした。ぶどう園は兄弟の手伝いがどうしても必要だったわけではなく、父の思いを学ばせるために行かせたでしょうから、兄、弟、どちらも自分でどう行動することにしたか、その決断で差が付きしました。

私なりに想像を膨らませて考えますが、兄はきっと、ぶどう園で重労働は回ってこなかったと思います。彼はぶどう園の主人のご子息です。ただ、父がぶどう園で見せたかったものを見ることはできて、それを目に焼き付けたのではないのでしょうか。

そうです。ぶどう園、つまり神の国がそこに表されているそのぶどう園は、どんな人でも喜びを味わい、そこに置いてもらうことを感謝できる場所なのです。兄は、それを学んで帰るだけで十分でした。

弟はどうでしょうか。兄が体験したすべての機会を失いました。行こうとしなかったのが、貴重な機会を台無しにしたのです。ぶどう園は、父の思いを知る大切な場所でしたが、そこに行ってくるのと、行かないのとでは、完全に違う結果になるのです。

イエス・キリストが招いてくださるこのミサも、言ってみれば三位一体の神が用意してくださった「ぶどう園」なのではないのでしょうか。このぶどう園に来た人は、主人が、一人ひとりに必要なものを惜しみなく与えてくださいます。最初「いやです」と心の中で思ったけれども、考え直して出かけてきた人もいるでしょう。それでもこの場所にしかない恵みに満たされて帰ることができるのです。

「子よ、ぶどう園へ行きなさい」と言われて「はい」と答えたつもりでも、実際には父の勧めに応えていないことが、私たちにもあるのではないのでしょうか。これでは信仰体験の分かちあいは生まれません。教会のミサでなければ体験できない喜び、すべての人を例外なく満たす恵みの体験は、他のどこでも得られないのですから、私への個人的な招き

は大切にしましょう。

主任司祭の私が幼い頃、遠洋漁業に従事していた父は教会のミサに行くことを渋っていました。しかし母は非常に機転が利く人で、前日から母方の祖母を家に泊まらせ、祖母から父親に「車を出して、ミサに連れて行っておくれ」とねだっていました。父は渋々、日産の大衆車を動かして、母と祖母を連れていき、本人もミサにあずかっていたのでした。今になって振り返ると、父は今日の福音に出てくる兄の姿が透けて見えます。

子供である私たちもミサに行きはしていました。あの頃の私は、ミサに来ることが恵みだとは理解できていませんでした。父も、母も、祖母も、それぞれ違う思いでミサに来ていたのでしょう。郷里の教会にも、確かに神様のぶどう園があったのだと思います。

私たちは、今日も主であるイエスから「子よ、ぶどう園へおいでなさい」と招かれています。あなたは来てくれさえすれば、計り知れない恵みに満たされます。三位一体の神しか与えることのできない恵みが、ミサという「主のぶどう園」にはあるのです。

後で考え直してからでも良いです。たとえ「いやです」という期間が長くても、「あとで考え直して」来てくれたら、分け隔てなく恵みをお与えくださいます。神は、どんなに長くかかっても、ご自身の思いに触れさせるために、「わたしのぶどう園においでなさい」と呼びかけ続ける神です。

年間第 27 主日(マタイ 21:33-43)